カトリック仙台教区報

2002年 8月 20日 No.147
発行
カトリック仙台司教区
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
Tel (022) 222-7371 Fax(022)222-7378
発行責任者 本部事務局
広報担当 田中丈夫
URL ; http://sendai.catholic.jp/

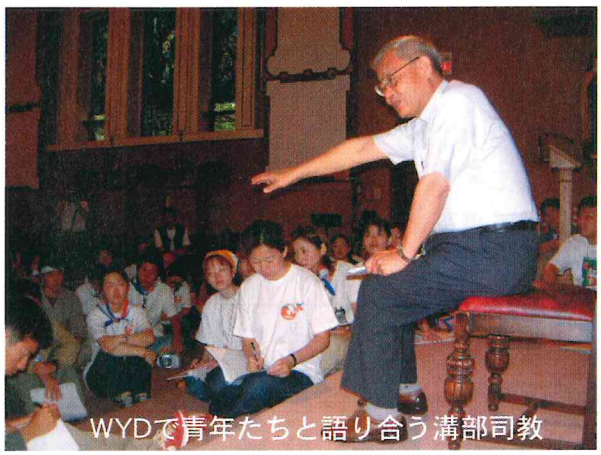
教皇メッセージ ―世界青年大会―

仙台教区 司教 溝部 脩

七月二七日（土）は夕の祈りにあわせて、教皇様が青年たちにメッセージを送りました。また二八日（日）の教皇ミサではすばらしい説教をされました。全文を翻訳することはできませんので、抜粋訳で二八日の説教の内容を解説します。

二八日の教皇ミサでは、神を排除した現代社会の問題を提示しています。「不幸をもたらすもっとも大きな欺瞞とその源は、神を排して人生を発見しようとすること、道徳的真理、個人の責任を排して、自由を発見しようとする錯覚にあります。」世俗化の波は現代を覆い、そして神と信仰の世界を全く無視してしまうことにあります。この社会に大切なのは兄弟愛に満ちた世界を打ち立てることにあるのです。だから次のように青年たちに勧めています。

「皆さんが住んでいる世界は、兄弟愛と人類の一致の新しい感性が絶対に必要なものとして求められている世界です。神の愛の美しさと富に触れられ、その愛のためには証しが必要です。地の塩、世の光である皆さんを必要としているのです。」


WYDで青年たちと語り合う溝部司教

青年は新しい世界をつくる立役者なのです。しかし、その青年たちは教会としっかりと結ばれて初めて現代社会を変える原動力となるのです。その教会も大きなスキャンダルに悩まされています。それがあったとしても、教会を通して初めて青年は世界を変える原動力となるのです。

「小さな炎も夜のとばりを追い払います。皆さんが教会との交わりにあれば、皆さんの光は一つになって光り輝くことでしょう。イエスを愛する皆さんは、教会を愛してください。教会のメンバーのある人達の罪と過ちに失望してはいけません。ある司祭や修道者が青年に与えた害と傷は、哀しみと恥ずかしさで私たちを満たします。しかし、奉仕すること、善を求めつづけ、寛大に捧げ尽くしている司祭や修道者がどれ程たくさんいるかに留意して下さい。今日ここに多くの司祭、神学生、修道者がいます。彼らの近くに居て、彼らを支えてください。皆さんの心の奥底に司祭職、または修道奉献の生活への呼びかけを感じるなら、十字架の王道を歩むキリストに従うことを恐れないでください。困難な時代であるからこそ、教会は聖性を追いつづけることを緊急の課題としています。聖性は年令の問題ではありません。それは霊において生きること、ここにあります。」

「皆さんは若い。教皇は年とっていて、そして少し疲れています。しかし、わたしが持っている希望と願望は、皆さんのそれと全く同じです。」新しい世紀が始まっている今こそ、教皇と共に新しい時代をつくる作業をしなければなりません。教会は、自分を世界と教会に捧げ尽くす若者を求めています。

私は仙台教区からも神の呼びかけに応える男女の青年が生まれることを希望しております。

何よりも教会を愛する青年がこの世界大会を通して生まれることを希望してやみません。

「家路につく私たちに聖アウグスティノは次のことばを伝えています。〝私たちは光の中で分かち合って、幸せでした。私たちは共にいることが喜びでした。私たちは実に大いに喜びました。しかし、各々が別れるにあたっても、彼（キリスト）を決して去らしめてはなりません〟」。

残滴

聖体祭儀を私たちはミサと云うが、それは最終誦の「イテ・ミサ・エスト」に依る。今は日本語で、「行きましょう。主の平和のうちに」と唱える。

▼「行きなさい。ミサは終わった」は直訳だが、本来は福音宣教への派遣の言葉。信者はミサで学んだことを実行し、ミサで頂いたお恵みを活用するように送り出されるのだ。キリストが使徒を福音宣教に派遣されたように、私たちも日曜日ごとに派遣されるのである。

▼福音宣教は様々な方法で行なわれ、信者は夫々の形で参加することになる。しかし福音宣教の最も基本的なことは、信者一人ひとりの福音宣教的な姿勢ではないだろうか。それはいったい何だろう。

▼「あの人が信じているなら」「あの人のようになりたい」など。福音の証人になることである。学校のお友達、職場の同僚、隣近所の知り合い、そして家族や親類の方々に対して、信頼を得るように。

▼むしろこの場合、言葉は先にならない。その人の内から出る人柄、温和、誠実、謙虚、といった自然徳だろう。しかし、その奥に福音の精神が生かされ、聖霊が強く働くよう、絶え間ない祈りを忘れないように。

（平）

司教館建設委員会ニュース

皆さまのご理解とご協力の御蔭で司教館建設に向けた歩みが力強く始まりました。施工業者も決定し、旧司教館の解体作業も八月十三日には無事終了いたしました。

また、教区内小教区にお願いいたしました募金協力も、募金申込額が目標の５０００万円に達しました。皆さまの寛大なご協力に対して心より感謝申し上げます。感謝の念を新たにしつつ、近況を報告させていただきます。

司教館建設の施工業者決定

去る七月十五日（月）開催された司祭評議会において、司教館建設の施工業者として〈（株）たくみ〉を選出いたしました。これを受け、直ちに「入札結果通知書」を当該事務所に発送し、今後の工事日程等の打ち合わせを設計管理者である月設計高田氏とともに進めて行くこととしました。

その後の打ち合わせで決定した工期日程の概要は表の通りです。

工期日程の概要

8月1日（木）から13日（火）	現司教館の解体撤去作業
8月19日（月）	司教館起工式
8月20日（火）から9月末	基礎工事
10月頃	上棟式
10月から12月	本体建物工事
1月から3月	内装工事
4月中	外溝工事及び植栽関係工事
5月	竣工式

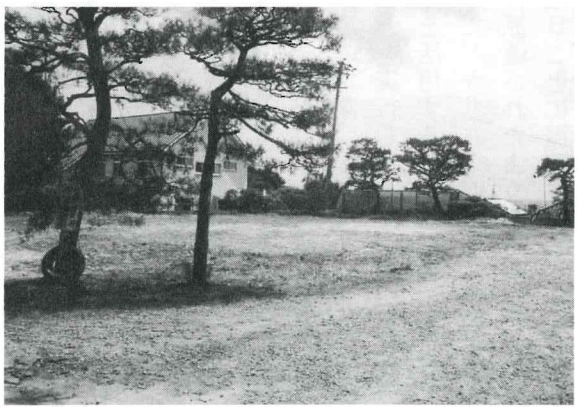
七月二七日（土）近隣説明会を開催

司教館建設に伴う工事車両の出入によって近隣諸施設に多大な迷惑をかけることになるため、お詫びとご理解・ご協力をお願いするため、説明会を開催しました。

説明会には、東仙台教会信徒会、オタワ愛徳修道女会、ナザレト幼稚園、ナザレト愛児園、スペルマン病院、光ヶ丘町内会の各代表が参加し、幼児の安全を何よりも配慮すること、そのために事前に対応できること（路上駐車禁止等）を確認いたしました。

新司教館起工式
八月十九日（月）十時三十分より

解体前の旧司教館
撮影二〇〇二年七月二十日



更地となった旧司教館跡
撮影二〇〇二年八月十四日

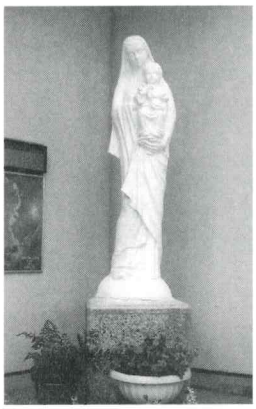
各地から

▼青森　浪打教会

私たちの教会は、夏から秋にかけて大忙しの日が続きます。八月一日に始まるサマーキャンプ（小学生）、中高生の合宿、本町教会との共同墓参。マリア祭と夕涼み会、九月には敬老小旅行、市内キリスト教協議会合同親睦旅行、米寿や金婚のお祝い、県信徒大会（青森明の星高校）、十月第一日曜日は同じ敷地内の幼稚園、ボーイ・ガールスカウト合わせて四団体の合同バザー、翌週は野外ミサなど行事が目白押しです。でも役割分担が行き届き、信徒はそれぞれの務めをきちんと果たしているので、特定の信徒に過重な負担がかかることはそれほどありません（尤も主任司祭の小松史朗神父は例外ですが…）。教会は一つの家庭、信徒は家族であると言われます。教会を活性化させるには、行事もその一つだと思いますが家族間の活発なコミュニケーションが必要でしょう。月一回発行の教会広報『かけはし（旧浪打教会だより）』は、この八月で三一八号を数えました。様々な事情で教会に来ることができない信徒にも、情報を早めにお知らせできるので感謝されています。特に似顔絵つきの「シリーズ信徒紹介」は好評です。かつては青森市の東端に位置していた教会も、今では東北線の南側に「自由ヶ丘」や「虹ヶ丘」、「浜館」といった団地が造成され、住宅地の中心になりつつあります。今年浪打教会は設立五十年を迎えましたが、三九〇名の信徒一同フレッシュな精神を失わず、今後も活発な活動を続けていきたいと思います。（日下）

▼岩手　北上教会

「イエス様、マリア様、今日も一日お守りください。」毎朝教会のシンボルともいえる幼子イエスを抱いた聖母像に、登園前の園児たちが祈ります。日曜日のミサでは、侍者も、奉納も子供達が務めます。ここ北上教会は、信者数は決して多くありませんが、こうした未来のある子供たちと共に、お互いのタレントを生かしながら、皆で教会の運営に携わっているとても家庭的で温かい教会です。（古谷）

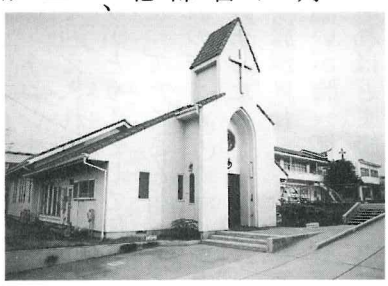


▼宮城　畳屋丁教会

本教会は、元寺小路、角五郎丁（現西仙台）教会についで、仙台市内で第三番目につくられた。市の南部に位置し、東北大学や東北学院大学の中心キャンパス、宮城学院女子大学、旧制二高等が近くにあり、県外から学都仙台に学ぶ信徒の学生が教会に、またその近くに住まい、地元出身の学生、青年と一緒に積極的に活動していた。また、どの主任司祭もよくかれらを導かれた。昭和二十年代から三十年代の後半までの仙台地区のカトリック・アクションの数々は、畳屋丁が中心になって進められていたといっても過言ではない。

近隣に名所旧蹟があるわけでも、特別に魅力ある活動や行事をもっている教会でもないが、家庭的な懐かしさを訪れる人に感じさせることができることをいまも誇りにしている。これまで二回聖堂を建て直しているが、創設時より聖堂・司祭館・信徒館が一体になっているのが特色。ミサ後すぐ集会室でお茶を飲みながら語らえる和やかさと楽しさがある。

現在、世帯数一四五、信徒総数一六五名、決して少ない数ではない。課題は創立八十五年を迎える教会の若返りをどう図るかにある。（佐藤）



▼福島　松木町教会

松木町教会は、一九〇四年に市の中心部にある信夫山に開設されたのが始まりで、その後聖堂も完成し、当時は、信夫山教会として市民に親しまれており、戦後になって信徒が増えたため、大町教会（現野田町教会）と松木町教会に分かれました。

一九三三年からドミニコ会の歴代の神父様が司牧下さり、現在はイエジ神父様が二年目を迎えています。信徒総数は約六七九名で、信徒会は八つの部に分かれ活動していますが、特に若者のために教会の中での居場所を考えたプチット・マリー会活動（コーヒー販売をとおしてストリート・チルドレンへの支援など）や、フィリッピンなど外国人のために、毎月第二日曜日のミサでは英語で書簡を朗読し、英語の聖歌も歌われます。また、「開かれた教会」の一環として毎年賑やかにバザーを実施しています。コングレガシオン・ド・ノートルダムのシスター方のご協力も頂きながら、主を証ししようと心を合わせて温かい教会づくりに努めているところです。（鈴木敏）

WYDに参加して・・・

ワールド・ユース・ディ

WYD体験

八木山教会　吉田　達哉

ＷＹＤ２００２トロント大会は、七月二三～二八日までの六日間で行われました。私達はその後二日間ブロック大学という所に宿泊してＷＹＤの振り返りをしたので、合計八日間、移動を含めると十日間の旅になりました。仙台教区及び日本公式団体が、無事参加し、日本に帰ってこられたことは、皆様のお祈りのおかげだと思っております。ここで、心からの感謝を申し上げます。

さてこれより私個人の話しに移りますが、私はＷＹＤ初参加どころか、海外旅行も初めてで、出発前は期待と不安で胸がいっぱいでした。（自分は外国人と会話が出来るのであろうか？他教区の人達と仲良くなれるであろうか？・・・etc・・・）でも出発してしまったら、そんな不安など感じる暇もないほどに、様々な企画が目白押しで、いつの間にか不安など消え去っていました。私がＷＹＤに参加した目的の一つに、「いろんな人々の考えを聞き、そして生き方を学ぶ。」というのがありました。今回のＷＹＤのテーマである『あなた方は、地の塩、世の光である。』は、いろいろ考えさせてくれるテーマであり、この大会中のカテケージスの題材でもありました。私が司教様方の話や、仲間の話を聞いて感じたのは、【地の塩、世の光　＝　キリストの生き方】ということであり、今回のテーマは《キリストを人生のお手本として生きなさい》ということであると考えました。テーマより、今回の目的の答えを見つけることが出来たのは本当に幸いでした。

最後に、ＷＹＤ参加を温かく見守ってくださった両親と八木山教会の人たち、そして仙台教区の皆様に、再度感謝の言葉を申し上げます。ありがとうございました。

たくさんのお恵みをいただいて…

東仙台教会　武内えり子

ＷＹＤ（世界青年の日）に共に参加した皆さん、ありがとう！カナダ・トロントにおいて私たちを温かく迎え入れてくださった皆さん、ありがとう！そして何よりも出発にあたってたくさん祈ってくださった教会の皆さん、本当にありがとうございました！

旅が終わり、今振り返ると感謝の思いが胸一杯に込み上げてきます。あれほどまでに毎日恵み多い日々を与えていただいたことが喜びとなって今でもまだ興奮が修まらない感じです。

出発前には全く想像していなかった事態がトロントで繰り広げられていました。世界中からやって来た若者達に街が占拠されている光景、国や民族に関係なく同じ信仰を持つ者同志が声を交わし、歌い、踊る光景…そこにいた私は力強い安心感と一体感、自分自身の存在感をはっきりと感じることができました。

ある司教様がおっしゃっていました。「ＷＹＤでの経験を自分の生き方に、人生に結びつけ反映させることが大事。それでなければただの旅の思い出に終わってしまう」

毎日のスケジュールに一つ残らず参加しました。そして自分一人の時間も持ちました。黙想し祈り、分かち合うことを大事に過ごしました。私たちの参加の姿勢も決して受け身ではありませんでした。毎日、神様に求めて、語りかけました。まさに求めると全て与えられました。

何を得てきたかは十人十色だと思います。しかし私は多くのお恵みをいただいて帰ってきました。悩みや迷いの多い「若者」と呼ばれる世代に今、自分がいることを幸せだと感じます。これからもＷＹＤの強烈な体験は忘れないでしょう。

小さなちから

元寺小路教会　森本　真

私は今年の七月二一日から八月一日の間、カナダのトロントで開かれたＷＹＤに日本の公式団体の一員としてとして参加させていただきました。仙台教区の十九名の一員としてこのＷＹＤに行く機会が与えられたことを、とても誇りに思います。

今回私がＷＹＤに行き、そのとき感じたこと、考えたことがみなさんに伝わっていただければ、うれしく思います。

トロントには巡礼という目的で世界各国から何十万人という青年が一堂に会しました。民族や言語、肌の色が違う人たちだが、キリスト教カトリック信者として同じ信仰をもっているという共通点のもと、この大会が行われました。

私はトロントに行く前、巡礼という意味を知りませんでした。巡礼というのは、辛いこと、苦しいことがやってきたとき、我慢することなのかなぐらいしか思っていませんでした。しかし、今回のＷＹＤの中で巡礼とは何なのか、少しだけど分かったような気がします。いくつかの体験を挙げたいと思います。

一つ目は、ワールドユースを運営するにあたって、ボランティアとして働いてくださった人たちです。会場で支給される昼、夜の食事はどのようにしてこんなに大人数分用意することができたのか。食事の用意だけでなく、いつも明るく笑顔で迎えてくれたことが私にとってすごく印象的です。こんなに大人数がいて、片言の英語しか話せない人たちに対して、すごく困惑することがあるだろうにもかかわらず、すごく自然な笑みを浮かべ、私たちにうれしさを与えてくれた。

また、七月二六日金曜日に十字架の道行きが行われた。これは、劇と歌(祈り)を織り交ぜて進められた。私たちはそれを大スクリーンで見ることができた。イエスが十字架を担いでいるとき、わたしは行く前に考えていた巡礼とは我慢することだという自分の考えを思い出しました。しかし、十字架を背負っているイエスには苦しいことに我慢するという雰囲気は伝わってこなかった。逆に私達に何か伝えているようなそんな気さえした。自分のできることを一歩一歩進んでいくような。

最後に私たちが大会期間中の大部分を過ごした小学校でお世話していただいた人たちとの体験です。ある日、私が夜になんとなしに"I am hungry."と言ったときである。現地のおばさんが私を小学校の二軒隣にある教会の地下の厨房に連れて行ってくれた。そこで、ドーナッツやポテトチップス、パンやコーヒーなどいろいろと出していただいた。そんなにお腹が減ってはいなかったが、自然とたくさん食べることができた。私の何気ない一言にこれほどまでしてくれた。食べ終わったあと、ありがとうと言って厨房から出て行った。

巡礼とは何だろう。この体験を通して私が感じたことは、つらいとき、苦しいときがあろうとも、下を見ないで自分のできることを精一杯やっていく。それが、ほかの人に伝わっていく。この人は私たちのために何かしてくださっていると。感謝の気持ち、ありがとうという言葉が出てくる。巡礼とは我慢することではなく、与えることのように考えるようになりました。私は気づかないうちにいろいろなことを多くの人から与えられてきた。

それに気づかなかったり、気づいていても知らないふりをしてきたような気がする。自分ひとりの力では絶対行くことのできなかった、ＷＹＤだと思います。仙台教区の十九名のメンバー、司教様や日本公式団体のメンバー、リーダーの方々本当にありがとうございます。また、トロントに行くにあたって、私たちの無事を祈ってくれた、お父さんお母さん、じいちゃん、ばあちゃん、仙台教区の方々、掛け替えのない体験をさせていただいて本当にありがとうございました。この感謝の気持ちを、自分のできる精一杯の一歩一歩で皆さんに与えていきたいと思います。

ＷＹＤに参加して

聖ウルスラ修道会　佐藤かおり

ＷＹＤに参加して、一番私の心に残っていることは、人々との出会いです。仙台教区グループの中で、ＷＹＤのすべての参加者の中で、本当にたくさんの人々に出会いました。あれほどたくさんの人が、同じ目的のために集まったということを思う時、感動せずにはいられません。同じ信仰を持つ人々と出会えることは、外国でも、いつもの教会でも、喜びです。

ＷＹＤに持ち込んだ思い、参加して得たものは、一人一人様々だと思います。そして、はっきりと気づかなくても、誰もが、この経験に生かされることは確かです。

「私の宝物」

北仙台教会　佐藤　彩

「the light of the world, the salt of the earth」（私たちは地の塩，世の光）のテーマを一つに世界中から多くの若者達がカナダのトロントに集まった。

正直言って、海外旅行初の私にとって、この未知の世界である「ワールド・ユースデイ」というものに出発する直前まで大きく不安を抱いていた。その頃の自分が教会から足が遠ざかっていたということもあるし、何のために？何をするんだろう？・・・信仰を深める？んー。半分観光の意識があったことも事実。

しかし、その不安なんて初めの一日ですっかり消えてしまった！毎日、目に映る全てのモノが新鮮、感動の連続であり、ＷＹＤのメーン会場であるエキシビジョンプレースで出会うたくさんの国の人達がまるで兄弟姉妹のようにさえ感じた。そこに言葉の壁なんて存在しないし、みんなで手を取り歌い、踊り、そして祈った。溢れるこの気持ちを言葉にすることは難しいが、例えてみるならば映画の感動のラスト、そのシーンにすっぽり入り込んでいる感じ。六日目は私にとって一番印象深い。暑い中寝袋片手に五時間も歩いた徒歩による巡礼、その目的地であるダウンズビューパークでの教皇様の夕べの祈り。約二十万人の一人一人が手に持ったキャンドルの輝き・・・。星の下での野宿。朝、目覚めた私達を襲った嵐。さっきの大雨はいずこへ？晴れて良かったその後の教皇ミサ。それら一つ一つに意味があり、神様からの大きなお恵みなんだって強く感じる。そのお恵みの大きさと言ったら今まで生きてきた十九年間で一番だと思う。

こんなに自分って感情的な人間だったっけ？と思うほどによく笑い、よく泣いた。私の周りには、辛いときに声を掛けてくださった司教様、神父様、そして夜遅くまで語り合ったたくさんの旅の仲間がいた。みんな気持ちは一つだった。

私にとってこの旅は大きな「宝物」だ！自分の中で何かが変われたって感じるし、何よりすぐそばに神様がいるんだということをいつも感じながらこれからの人生につなげていきたい。

最後に、これはＷＹＤで出会った「仲間」とよく歌った歌です。

「なかま」

それぞれが違う場所で生まれて育ち
違う足跡を残し歩んできた
強い力によって　路が重なり
あって
いまここに集まった
キリストのもとにあって
共に祈っている
たくさんの仲間達と今ここにいる
苦しみや喜びを共に分かち合って
神様に感謝しよう　素晴らしい友達とめぐり会えたことを
みんなで心を合わせて
共に祈っている
それぞれが道を見つけ歩き始める
結ばれた強い絆
共に過ごした日々
どんなに離れてても
決して消えることない永遠の宝だから
キリストの元にあって
いつまでも仲間だから

ワールド・ユースデイ参加ルポ

北仙台教会　村中　隆子

「願いなさい。そうすれば与えられるから…」　二〇〇二年二月。ＷＹＤの資料をいただきに教会を訪問した際、受付にいらっしゃった方が何気なくおっしゃった言葉。でもこの言葉のおかげで、本当に信じられないことが起こった。絶対絶命！もう今度こそはダメだろう…と、ＷＹＤ行きを何度断念しそうになったか…。それでも、私はなんとかカナダにたどり着くことができた。そして二〇〇二年八月一日、ＷＹＤが終って帰国。噛めば噛むほど旨味（あじ）がでる、スルメのような旅になりそうだ…と帰りの機内でふと思った。それくらい、今回のＷＹＤで私たちは激動の日々を過ごし、共によく泣いて、笑って、かなり目まぐるしく劇的な十二日間を味わった。

そしてそれは、日本でのカテケージスの準備から始まった。（プログラムの中の一つ。仙台教区が担当したカテケージスのこと。マタイ五章「山上の説教」に続くあの有名な個所「あなたがたは地の塩である」がテーマだった）その中で、溝部司教様と私たちが対話方式ですすめる一時間ほどのワークショップがあった。司教様からいただいた五つの質問に、それぞれが体験談を交えながらみんなの前で分かち合うものだった。その中で私が与えられた質問は、「教会を創る」というテーマであった。「洗礼によってあなたは教会の一員となっています。洗礼をうけて今まで、教会の一員として感じ取っていましたか。感じ取っているとすれば、どんなことを通してですか。感じ取っていないとすれば、どこに原因がありますか」と…。今までに考えたこともなかったような、ミステリアスな質問だった。そう、今までの私にとって「教会」という存在は、奇妙でミステリアス…出来れば近づきたくないそういう類のものだった…ということに気がついた。私個人のＷＹＤへの旅は、ここから始まったのかもしれない。

そして迎えた七月二一日（日）。出発当日。みんなで元寺小路教会の早ミサに参加。その後、九時半のミサに集まった信徒の方々の前で、一人ずつ出発の挨拶を述べた。私たちの「心の成長」のために、カナダ行きを温かく見送ってくださる、おひとりおひとりの気持ちがジーンと伝わってきた。みんなの心が一つになってあらためて

「私たちがトロントへ出発できるのは、多くの方々が支えてくださっているからなんだ…」と実感した。まずい…「私も教会の一員なんだ！」と気づいてしまった。

そして、カナダでの十二日間。時差と激しい紫外線、二四日（水）のカテケージスまでは日中の疲れを癒す間もなく遅い時間から始まるミーティング、連日深夜遅くの就寝…。暑さや疲労で倒れた人もいた。でも色々な出会いがあって、色々な出来事があって、本物の信仰にふれることが出来た。また、司祭の方々が主の癒しと豊かな恵みにふれて、十二日間で見事に蘇る姿を目の当たりにして、祭司職に携わる方々がいかに神聖で尊い存在であるかも垣間見ることができた。そして今、私はふたたび仙台に戻ってきた。あまりにもあっという間で、自分がＷＹＤに参加したことも夢のような気がした。でもいざ戻ってみると、教会の方々の温かい思いと、何気なく過ごしてきた教会の本来の姿が心に飛び込んできた。今まで自分がいた教会とは、まったく違って見えた。あ。戻ってきた！と思って嬉しくなった。

ＷＹＤで私がいただいてきたお恵みは「信仰のめがね」だったのだ。心の曇りがいっぺんに吹き飛んだ。あんなに悩んで考えた、司教様からの質問。答えは意外にも身近なところにあった。

迷える私を果てしなく捜してくださった、多くのスタッフの方々と、参加者の皆さまに感謝しつつ…。

二〇〇二年八月十三日

ＷＹＤ日本シンボルマーク

耳知識　あれこれぎっしり詰め込んで北の故郷から北の国へと

八戸塩町教会　赤坂　一明

今回、ＷＹＤで訪ねたトロントは、緯度の上では私が住んでいる青森より北方にあるにも関わらず、直射日光が厳しく乾燥した空気の気候の都市でした。初めて海外へ飛び出すということもあり、事前に旅の心得を経験者に聞いて回り、自分なりに余裕も考えて荷物をスーツケース一個・リュックサック一個にまとめました。

さて、私は会社勤めをしている人間です。参加する期間中の十日ぐらいは会社へ事前の届出を出さなくてはなりません。総務の人から有給休暇の用紙をもらい上司に提出するわけですが、この不況の最中どのように説明するかで大いに悩みました。結局、自己啓発目的でセミナーに行ってくるのだと伝えると意外にもあっさり受け入れられました。それどころか珍しがられたぐらいです。これで仕事の不安はなくなりました。

ところで、海外に出てみて気がつくのは自分という人間は日本の枠組みにとらわれているということです。日本と自分が、大体同一円形だとすると、海外は楕円形や長円形だったりします。そのようなことがきっかけだったのか自分自身を知る、貴重な経験がありました。それは、ミサを受けるときの心構えです。ある日、大会のプログラムから離れて、宿泊地である小学校の外で休んでいると、同じように休んでいる青年らが、ギター片手にミサ曲を歌いだしました。楽しげに歌っている彼らの歌声が次第に地区の人々を巻き込んでいくのを何気なく聞いているうちに、愕然とする思いをしました。自分には喜んでキリストを受け入れる心構えがあるのかと。ミサを受けるということは、私もそこの共同体に参加しています。一緒にミサを創っています。それまで立派な教会で行われるミサに惹かれていた私でしたが、キリストのもとに集って喜び、歌うのがミサなのだということを、この経験を通じて私は知りました。

これを元に、これからのミサに与ろうと思います。

ワールドユースデイ

元寺小路教会　藤村　陽子

初日、トロント空港には夜の十時頃到着しました。「トロントに着いたぞ～」と、しみじみと感慨に耽っておりましたが、なかなか荷物が出てきません。三十分、一時間・・・まだ出てこない。ようやく愛しき荷物とご対面できたのは、時計の針が十二時を回った頃でした。荷物が遅れた理由は、物凄い大雨の為荷物が運び出せなかったとの事。私は荷物だけが違う国へ飛んでいってしまったのでは、と本気で心配しました。

二日目からは小学校へ宿泊。小学校なだけにシャワーの設備はなく、その日から七日間満足に体を洗うことはできませんでした。ビックリ！しかし、何もしなかったわけではなく、洗面所で、頭を洗ったり、体を拭いたりして、その日の汗を流しました。もしかして病気になるのでは？と考えたりもしましたが、とんでもない、人間の体はそんなにヤワではありませんでした。よかった～。

六日目の午後、最後のカテケージスが終わり昼食を取りにエキシビションプレイスへ。出発する時から雨が降り出し、ご飯を食べるころには本降りとなり、傘を差し、立ったままでの食事となりました。雨の雫がお皿にも落ちます。カナダの雨とシチューがミックスされ、ますます美味しくなったでしょうか？

ワールドユースデイは、日常、そして今までの旅行では、味わう事のできないものを私に与えてくれました。毎日、朝早く

から夜遅くまで、そして毎日多くの距離を歩きました。きっと、楽な方法もあったのかもしれませんが、あの過酷な毎日を乗り越えたからこそ、ワールドユースデイは私の心の中でいつまでも輝き続け、励まし続けてくれることと思います。ワールドユースデイは私に「体験する」という尊さを教えてくれた旅だったと思います。

今回、ワールドユースデイの原稿を三ヵ所から依頼されました。カナダでの日々に全力投球した私は、帰国後すっかり疲労困憊してしまい、時差ボケにも悩まされ、なかなか原稿を書く気が起こりませんでした。それでもやはり書かねばならず・・・。

原稿を書く時は、ワールドユースデイのことを思い出します。始めから終わりまで、何度も何度も。思い出す度、新たな発見、感動があり、それらが文字となり原稿が出来上がっていきます。「あ～この原稿を書くのもお恵みだな」と思いました。

神様の呼びかけでＷＹＤに集まった約五十万人の青年たちは、イエス様への信仰から、文化の違いを超えてつながり、ひとつになったのです。

元寺小路教会　宇田　愛

七月二十一日、元寺小路教会のミサでたくさんの祈りに見送られてトロントで行われるＷＹＤへと旅立った私達は、八月一日に無事帰国しました。ＷＹＤに参加できたのも、無事帰国できたのも、多くの恵みを受けることができたのも、皆さんのたくさんの支えがあったからだと強く感じています。本当に感謝しています。ありがとうございます。

神様の呼びかけでＷＹＤに集まった約五十万人の青年たちは、イエス様への信仰から文化の違いを超えてつながり、ひとつになっていました。「世界はひとつ」ということをとても強く感じました。たくさんの出会いを通して神様とも出会い、常に共に過ごしている、ということも感じました。また、日本の様々な教区の青年たちと交われたことはこれからの私達にとってとても大切なつながりになったと思います。私達は、たくさんの思いを分かち合い、共に喜び、多くのことを感じ、自分の使命と役割をみなおしました。

仙台教区では、八月十七日北仙台教会で司教様との祈りの集いがありました。今までないぐらいたくさんの青年が集まりました。ＷＹＤの期間中、仙台教区、京都教区、大阪教区が分担して今回のＷＹＤのテーマである「あなたがたは地の塩、世の光である」についてのカテケージスがありました。仙台教区が担当した「あなたがたは地の塩である」を今回も溝部司教様がカテケージスしてくださいました。私が受けたＷＹＤでの実り、信仰、希望、愛、平和について、出会いの大切さ、共に生きること、一人一人の役割、というメッセージをこういうところで伝えていく必要があると感じました。ほかの教区でもこうした集いが行われていて、ＷＹＤの経験は、私達を神様の子として、地の塩として、世の光として新しく生まれ変えたのです。これから私が受けた恵みをどういかすかが大切になると思います。青年たちのこれからを見守ってください。本当に教区のみなさんに感謝しています。そして共に過ごした友と神様にも心から感謝しています。

私の気分転換

畳屋丁教会　斎藤潤子

自慢ではないが（？）私には、北は北海道から南は九州まで、年齢も様々に多くの知人がいる。人間にはいろいろな顔がありいろいろな評価がある。私への評価は「元気」とか「明るい」というものが多い。しかし、そんな私にだって一人で静かになりたい時や、誰かに愚痴を言いたい時がある。そんな時は、それがどこであろうと会いに行ったり、電話などで話すという手段をとる。私の気分転換は、「誰かと何かをすること・何処かに行くこと」つまり、現在の現実の世界から、心身共に私を開放してくれる人たちや場所に出会うことである。いつもと違う環境に身をおくことや多くの知人たちとの語らいは、私に自由と開放感、さらに活力を与えてくれる。人間が大好きな私は、無意識のうちに多くの知人に自分の素顔を見せ、知らず知らずのうちに気分転換を図っているのかもしれない。